

教育場面における規範逸脱行動に対する態度

－推測された他者の態度に着目して－

出口拓彦

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育臨床心理学))

Attitudes toward Rule-breaking Behavior in Educational Settings: Focusing on Guessed Attitudes of Others

Takuhiko DEGUCHI

(Department of School Education, Nara University of Education)

要旨: 教育場面での規範逸脱行動に対する自分の態度および(自分が推測した)他者の態度との関連について検討した。大学生を対象に質問紙調査を実施し、371名から回答を得た。質問紙では、「自分が逸脱行動をする・しない」(2場面)、「周囲の他者が逸脱行動をする・しない」(2場面)という場面を組み合わせた計4つの場面それぞれに対する、「自分」および「周囲にいる他者」の態度(満足度)を測定した。そして、これらの回答を、「遵守」「逸脱」「同調」「反対」「中立」という5つの行動基準に分類した。自分と他者の行動基準の関連について分析した結果、全体的には「自分と同様の行動基準を他者も持っている」と認識される傾向が示唆されたが、「自分よりも他者の方が、逸脱行動に対してやや厳しい行動基準を持っている」ととらえられている傾向も一部に示された。最後に、本研究の実践への応用可能性等について考察した。

キーワード: 規範逸脱行動 rule-breaking behavior
態度 attitudes
大学生 undergraduate students

1. はじめに

本研究は、教育場面における規範逸脱行動に対する態度について、自分の態度および(自分が推測した)他者の態度との関連に着目して検討することを目的とした。規範逸脱行動に関する研究は数多い(e.g., Cialdini, Reno, & Kallgren, 1990; 北折・吉田, 2000; Osman, 1982; Reno, Cialdini, & Kallgren, 1993)。また、教育場面における規範逸脱行動も、多くの研究で取り上げられている(e.g., 出口, 2015; Durmuscelebi, 2010; 北折・太田, 2011; 水野, 1998, 2001; Özben, 2010; 島田, 2002; 杉村・小川, 2003)。

規範逸脱行動については、行為者が持つ規範意識の影響(出口・吉田, 2005)のみならず、周囲にいる他者の行動の影響に着目した研究もある(e.g., Cialdini, Kallgen & Reno, 1991; 北折・吉田, 2000)。Cialdini et al. (1990)は、「多くの人々が実際の行動としてとるであろうとの知覚に基づく、行為的な」(北折・吉田, 2000; p.30)規範を「記述的規範」と呼び、「多くの人々が適切・不適切と知覚することに基づく」(北折・吉田, 2000; p.30)規範である「命令的規範」と区別している。この記述的規範は、ゴミのポイ捨て(Cialdini et al., 1990)や駐輪違反(北折・吉田, 2000)など、公共場面における規範

逸脱行動に影響を及ぼす可能性が指摘されている。

このような「周囲の他者」の影響に着目しつつ、個人の規範逸脱行動に対する態度が、公共場面の規範逸脱行動に及ぼす影響について検討した研究がある(Deguchi, 2014)。この研究は、相互依存性理論(e.g., Kelly, Holmes, Kerr, Reis, Rusbult, & Van Lange, 2003; Thibaut & Kelley, 1959)やゲーム理論(e.g., Axelrod, 1980a, 1980b; Nowak & Sigmund, 1992, 1993; Rapoport & Guyer, 1966; Scodel, Minas, Ratoosh, & Lipetz, 1959)における利得行列ないし決定行列を用いたシミュレーションを基にしている。具体的には、まず、「自分」と「周囲の他者」が、逸脱行動を「する」か「しない」という状況を組み合わせ合わせた計4つの場面を設定する。4つの場面とは、以下の通りである。①「あなたも、周囲の人たちも、していない」(R)、②「あなたはしていないが、周囲の人たちはしている」(S)、③「あなたはしているが、周囲の人たちはしていない」(T)、④「あなたも、周囲の人たちもしている」(P)。各状況は、前述の括弧内に示された4つのアルファベット(R, S, T, P)を用いて示される(これらのアルファベットの意味については、Axelrod(1984)、出口(2014)、齋藤(1999)などを参照されたい)。次に、R, S, T, Pそれぞれの状況に対する自分の態度を0(否定的)ないし1(肯定的)で設定する。具体的には、R:S:T:P =

1:1:0:0であれば、 $R > T$ かつ $S > P$ となり、相手が規範を逸脱していようがいまいが、自分は規範を遵守した方が、満足度が高いことを意味する。このような決定行列は、「遵守」という行動基準に分類される（以後、 R, S, T, P の各値を「態度」、4つの態度を組み合わせた決定行列を分類したものを「行動基準」と記す）。 $R:S:T:P = 0:0:1:1$ であれば、「遵守」とは逆に $R < T$ かつ $S < P$ となり、相手が規範を逸脱していようがいまいが、自分は規範を逸脱した方が、満足度が高いことを意味する。このような決定行列は、「逸脱」という行動基準に分類される。また、 $R:S:T:P = 1:0:0:1$ であれば、 $R > T$ かつ $S < P$ となり、「相手が規範を遵守している場合、自分も遵守した方が満足」であるが、「相手が規範を逸脱している場合、自分も逸脱した方が満足」であることを意味する。つまり、相手と同じ行動を取るときに満足する。これは「同調」の行動基準に分類される。 $R:S:T:P = 0:1:1:0$ であれば、「同調」とは逆に $R < T$ かつ $S > P$ となる。これは、「相手が規範を遵守している場合、自分は規範を逸脱した方が満足」であるが、「相手が規範を逸脱している場合、自分は遵守した方が満足」であることを意味する。つまり、相手と反対の行動を取るときに満足する。この決定行列は、「反対」の行動基準に分類される。

この4つの行動基準（「遵守」「逸脱」「同調」「反対」）を、Deguchi(2014)は、コンピュータ上にある数百個のセル（「人」を表す）に、その比を様々に変化させて（ex. 遵守：逸脱：同調：反対 = 4:3:2:1）入力した。そして、これらのセルを2次元上のマトリクス（「教室」等を表す）に配置して相互作用をさせ（いわゆる「セル・オートマトン法」（e.g. 小杉・藤沢・水谷・石盛, 2001; Latane, Nowak, & Liu, 1994; Nowak, Szamrej, & Latane, 1990; 志村・小林・村上, 2005）によるシミュレーション）、規範逸脱行動がマトリクスに拡散する要因について検討した。その結果、①「逸脱」の行動基準を持つ者の割合が「遵守」の行動基準を持つ者の割合よりも高いこと、②自分が持つ「行動基準」に沿って行動するだけでなく、一定の割合で、他者の行動に「つられて」行動する（例：「遵守」の行動基準を持つセルであっても、もしも自分の周囲にいる他者の多くが規範を逸脱していた場合は、自分も時々逸脱行動をする）、等の条件下において、逸脱行動が拡散しやすくなることを見いだしている。

しかし、この研究は、人工的に作成された利得行列を用いたコンピュータ・シミュレーションによるものであった。このため、決定行列を使用して規範逸脱行動を考察することの妥当性について、現実場面の「人」から測定されたデータを用いての検討はなされていない。

このような問題点を踏まえ、出口(2014)は、大学生を対象とした質問紙調査によって、利得行列における R, S, T, P の各値（規範逸脱行動に対する態度）を測定した。そして、これらの値を基に決定行列を作成、行動基準に分類し、逸脱頻度との関連について検討した。その結果、

全般的な傾向として、「遵守」よりも「逸脱」の行動基準を持つ者の方が逸脱頻度が高く、「同調」の行動基準を持つ者の逸脱頻度は「遵守」と「逸脱」の中間となる傾向が示された。すなわち、理論的に予測される結果に沿ったものとなり、決定行列を用いて規範逸脱行動を考察することについて、一定の妥当性が示された。

また、教育場面における逸脱行動の1つである「私語」については、学生自身は否定的な態度を持っている（「してはいけないこと」と考えている）が、他者（学級）の規範に従って私語をしている可能性が指摘されている（卜部・佐々木, 1999）。このことから、自分の行動基準だけでなく、他者の行動基準も規範逸脱行動に影響を与えている可能性が考えられる。これに関して、出口(2015)は、「他者の行動基準」と私語の頻度との関連について検討している。ここでの「他者の行動基準」とは、「自分が、『自分の周囲にいる他者が有しているであろう』と推測している行動基準」のことである。すなわち、「自分の周囲にいる他者」が持っていると思われる R, S, T, P の各値を測定し、これを基に決定行列を作成、行動基準に分類したものである。そして、他者の行動基準が、（自分の）「授業と無関係の私語」の頻度に影響を与えている可能性を報告している。

さらに、出口(2015)は、「私語」のみならず、「メール」「代返」等、教室内で生じる他の規範逸脱行動にも着目し、自分および他者の行動基準の関連について分析している。その結果、自分の行動基準と他者の行動基準は、一致する傾向にあることが示された。すなわち、「他者も、自分と同様の行動基準を持っている」と認知している学生が多い傾向が見られた。また、「メール」「内職」という逸脱行動においては、自分の行動基準の方が、他者の行動基準よりも、「遵守」の割合が高かったことを報告している。卜部・佐々木(1999)は、授業中の「私語」に着目し、個人が持つ逸脱行動に対する態度よりも集団規範の方が寛容であると考え「規範の過寛視」（p. 283）が示されたことを報告している。そして、学生は、個人的には私語を否定的にとらえているにもかかわらず、他者（クラス）の規範に応じて私語をしている可能性について考察している。

しかし、卜部・佐々木(1999)の研究は「授業中の私語」に焦点を当てたものであり、出口(2015)の研究で扱われた規範逸脱行動も「授業と無関係の私語」「授業に関する私語」「メール」「代返」「内職」「居眠り」（出口, 2015）という6つのみであった。自己と他者の規範逸脱行動に対する態度ないし行動基準の関連について詳細に検討するためには、より多様な逸脱行動について扱う必要があると考えられる。

以上のことから、本研究では、「授業中に、教室を出たり入ったりする」、「授業に、遅刻する」という、授業自体への参加・不参加に関する逸脱行動についても検討することとした。さらに、より多くの逸脱行動について検

討するため、「授業中に、イヤホンで音楽を聴く」というような、「直接的・物理的な悪影響（「私語」をして教員の声聞き取りにくくする等）は比較的与えにくいものの、授業と無関係の行動をしていることが他者に分かる」行動についても扱うこととした。なお、出口・吉田(2005)は、私語の頻度と「学業に関する適応感」の間に、微弱的な負の相関があることを報告している。したがって、逸脱行動に対する態度と学業的な適応との関連についても検討するため、行動基準と授業への出席率との関連についても、併せて検討することとした。

2. 方法

2. 1. 測定した変数

以下の変数について、質問紙によって測定した。「その他」に記載した変数を除き、測定順（質問紙への掲載順）に変数を記載する。

- (1) 自分の規範逸脱行動に対する態度 以下の9つの規範逸脱行動について扱った(吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折(1999)、小牧・岩淵(1997)、等を参考にした)。
- ①「メール」(「授業中に、携帯メールを使用する」)、
 - ②「内職」(「授業中に、他の科目の課題等をする」)、
 - ③「出入り」(「授業中に、教室を出たり入ったりする」)、
 - ④「飲食」(「授業中に、飲食をする」)、
 - ⑤「音楽」(「授業中に、イヤホンで音楽を聴く」)、
 - ⑥「私語1」(「授業中に、授業と無関係の私語をする」)、
 - ⑦「私語2」(「授業中に、授業に関する私語をする」)、
 - ⑧「遅刻」(「授業に、遅刻する」)、
 - ⑨「代返」(「授業の出席をとるときに、代返をする」)。
- なお、出口(2015)で扱われた「居眠り」については、「逸脱」状態にある者(居眠りをしている者)は、他者の知覚が困難となる行動であり、これについて決定行列を用いて検討することは必ずしも適切ではない可能性(出口, 2014)が考えられた。このため、本研究では扱わなかった。

これらの9つの行動に対する態度について、出口(2015)と同様の方法で測定した。これは、「自分が逸脱行動をする・しない」(2場面)、「周囲の他者が逸脱行動をする・しない」(2場面)という場面を組み合わせ、計4つの場面それぞれに対する自分の満足度について回答するものである。具体的には、最初に、測定の対象となる規範逸脱行動を「『○○○○する』ことについて」等と提示した。次に、「あなたも、周囲の人たちもしている」、「あなたはしているが、周囲の人たちはしていない」、「あなたはしていないが、周囲の人たちはしている」、「あなたも、周囲の人たちも、していない」、という4つの状況を提示した(P, T, S, Rの順)。そして、「7.とても満足」～「1.非常に不満」

の7段階で、それぞれ回答を求めた(4場面×9逸脱行動の計36項目について回答を求めた)。「2」～「6」については、数字のみを記載し、「とても満足」等の文字は記載しなかった。なお、「周囲の人たち」については、「あなたの席の近くに座って、この授業を受けている人たち(友人以外の人も含みます)」と教示した。

- (2) 他者の規範逸脱行動に対する態度 前述の9つの規範逸脱行動について、同じく4つの状況を提示した。そして、「もしも、この授業が以下のような状況になったとしたら、周囲の人たちは『満足だ』と考える、と思いますか? それとも『不満だ』と考える、と思いますか?」と問うた(出口(2015)を基にした)。そして、「7.とても満足だと考える」～「1.非常に不満だと考える」の7段階で、それぞれ評定を求めた。
- (3) 授業への出席率 質問紙を実施した授業への出席率について、「約()割」という回答欄を設定し、記入を求めた。
- (4) その他 上記の他、回答者の性別等について、回答を求めた。

2. 2. 手続き

質問紙はB4サイズの用紙に両面印刷した。質問紙の最初には、調査の目的や内容の他に、調査が匿名であること、回答の内容が授業の成績に影響することは一切ないこと、回答したくない質問については回答しなくても良いこと、等について記載した。

調査時期は2009年6月。大学生を対象として質問紙調査を行い、372名(男子133名、女子272名、不明7名)から質問紙を回収した。質問紙は2つの授業のクラスにおいて、集団で配付・回収した。授業は150人以上の履修者がいる多人数のものであった。

3. 結果と考察

3. 1. 分析の対象としたデータ

回収した372枚の質問紙のうち、白紙であった1枚を除外した371枚の質問紙データを分析の対象とした。

3. 2. 自分と他者が持つ態度の関連

「あなたも、周囲の人たちも、していない」(R)、「あなたはしていないが、周囲の人たちはしている」(S)、「あなたはしているが、周囲の人たちはしていない」(T)、「あなたも、周囲の人たちもしている」(P)、という4つの状況に対する回答を基に、態度を5種類の行動基準に分類した。この分類方法は、Deguchi(2014)による4つの分類方法に「中立」を加え、さらに、「遵守」「逸脱」の定義を拡張したもの(出口, 2014, 2015)である。

分類方法の詳細は、以下の通りである。①「遵守」(R>T

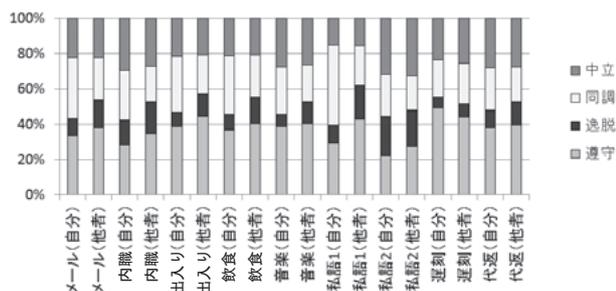


Figure 1 規範逸脱行動に対する行動基準の分布

Table 1-1 自分と他者の行動基準(メール)

自分/他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	63	19	24	15	121
	期待度数	46.13	18.72	29.08	27.07	
逸脱	度数	9	10	7	9	35
	期待度数	13.34	5.41	8.41	7.83	
同調	度数	48	17	48	12	125
	期待度数	47.65	19.34	30.04	27.97	
中立	度数	18	10	8	45	81
	期待度数	30.88	12.53	19.47	18.12	
合計		138	56	87	81	362

Table 1-2 自分と他者の行動基準(内職)

自分/他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	59	13	21	8	101
	期待度数	35.20	18.20	20.40	27.20	
逸脱	度数	14	17	5	14	50
	期待度数	17.40	9.00	10.10	13.50	
同調	度数	37	16	40	7	100
	期待度数	34.80	18.00	20.20	27.00	
中立	度数	14	18	6	67	105
	期待度数	36.60	18.90	21.20	28.30	
合計		124	64	72	96	356

Table 1-3 自分と他者の行動基準(出入り)

自分/他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	82	15	22	18	137
	期待度数	60.60	18.10	30.10	28.20	
逸脱	度数	11	12	1	5	29
	期待度数	12.80	3.80	6.40	6.00	
同調	度数	51	8	48	6	113
	期待度数	50.00	15.00	24.80	23.20	
中立	度数	13	12	7	44	76
	期待度数	33.60	10.10	16.70	15.60	
合計		157	47	78	73	355

Table 1-4 自分と他者の行動基準(飲食)

自分/他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	79	16	24	12	131
	期待度数	52.70	19.80	31.50	27.10	
逸脱	度数	11	12	4	6	33
	期待度数	13.30	5.00	7.90	6.80	
同調	度数	45	14	51	8	118
	期待度数	47.50	17.80	28.30	24.40	
中立	度数	9	12	7	48	76
	期待度数	30.60	11.50	18.30	15.70	
合計		144	54	86	74	358

Table 1-5 自分と他者の行動基準(音楽)

自分/他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	87	15	21	15	138
	期待度数	55.90	17.00	28.90	36.20	
逸脱	度数	9	7	2	7	25
	期待度数	10.10	3.10	5.20	6.60	
同調	度数	38	9	45	5	97
	期待度数	39.30	11.90	20.30	25.50	
中立	度数	11	13	7	67	98
	期待度数	39.70	12.00	20.50	25.70	
合計		145	44	75	94	358

Table 1-6 自分と他者の行動基準(私語1)

自分/他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	68	14	13	9	104
	期待度数	44.60	20.10	23.30	16.00	
逸脱	度数	11	16	3	5	35
	期待度数	15.00	6.80	7.90	5.40	
同調	度数	65	29	58	8	160
	期待度数	68.60	30.90	35.90	24.50	
中立	度数	7	9	5	32	53
	期待度数	22.70	10.20	11.90	8.10	
合計		151	68	79	54	352

Table 1-7 自分と他者の行動基準(私語2)

自分/他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	37	11	24	6	78
	期待度数	21.20	16.40	15.20	25.20	
逸脱	度数	15	29	12	23	79
	期待度数	21.50	16.60	15.40	25.50	
同調	度数	32	16	26	10	84
	期待度数	22.80	17.60	16.40	27.10	
中立	度数	12	18	7	75	112
	期待度数	30.50	23.50	21.90	36.20	
合計		96	74	69	114	353

Table 1-8 自分と他者の行動基準(遅刻)

自分/他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	105	11	38	21	175
	期待度数	77.10	13.30	39.50	45.00	
逸脱	度数	5	5	5	6	21
	期待度数	9.30	1.60	4.70	5.40	
同調	度数	34	2	34	5	75
	期待度数	33.10	5.70	16.90	19.30	
中立	度数	12	9	3	59	83
	期待度数	36.60	6.30	18.80	21.30	
合計		156	27	80	91	354

Table 1-9 自分と他者の行動基準(代返)

自分/他者		遵守	逸脱	同調	中立	合計
遵守	度数	83	13	24	14	134
	期待度数	53.20	17.70	26.00	37.00	
逸脱	度数	10	13	6	8	37
	期待度数	14.70	4.90	7.20	10.20	
同調	度数	38	11	32	4	85
	期待度数	33.80	11.30	16.50	23.50	
中立	度数	10	10	7	72	99
	期待度数	39.30	13.10	19.20	27.30	
合計		141	47	69	98	355

Table 2 自分と他者の規範逸脱行動に対する各行動基準の差

逸脱行動		遵守		逸脱		同調		中立	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
メール	自分	.33	.47	.10	.30	.35	.48	.22	.42
	他者	.38	.49	.15	.36*	.24	.43*	.22	.42
内職	自分	.28	.45	.14	.35	.28	.45	.29	.46
	他者	.35	.48*	.18	.38	.20	.40*	.27	.44
出入り	自分	.39	.49	.08	.27	.32	.47	.21	.41
	他者	.44	.50	.13	.34*	.22	.41*	.21	.40
飲食	自分	.37	.48	.09	.29	.33	.47	.21	.41
	他者	.40	.49	.15	.36*	.24	.43*	.21	.41
音楽	自分	.39	.49	.07	.26	.27	.45	.27	.45
	他者	.41	.49	.12	.33*	.21	.41*	.26	.44
私語1	自分	.30	.46	.10	.30	.45	.50	.15	.36
	他者	.43	.50*	.19	.40*	.22	.42*	.15	.36
私語2	自分	.22	.42	.22	.42	.24	.43	.32	.47
	他者	.27	.45	.21	.41	.20	.40	.32	.47
遅刻	自分	.49	.50	.06	.24	.21	.41	.23	.42
	他者	.44	.50	.08	.27	.23	.42	.26	.44
代返	自分	.38	.49	.10	.31	.24	.43	.28	.45
	他者	.40	.49	.13	.34	.19	.40	.28	.45

注：対象となる行動基準を1, 他を0と数値化した場合の, 対応のあるt検定の結果を示した。「平均」の値は, 各行動基準が全体に占める割合に等しい。
* $p < .05$.

かつ $S > P$ 」, 「 $R = T$ かつ $S > P$ 」, 「 $R > T$ かつ $S = P$ 」)。基本的に, 規範逸脱行動に対して否定的な傾向を持つ。②逸脱 (「 $R < T$ かつ $S < P$ 」, 「 $R = T$ かつ $S < P$ 」, 「 $R < T$ かつ $S = P$ 」)。基本的に, 逸脱行動に対して肯定的な傾向を持つ。③「同調」 (「 $R > T$ かつ $S < P$ 」)。周囲の他者が逸脱行動をしていない場合は逸脱行動に対して否定的な傾向を持ち, 周囲の他者が逸脱行動をしている場合は, 肯定的な傾向を持つ。④「反対」 (「 $R < T$ かつ $S > P$ 」)。「同調」とは逆に, 周囲の他者が逸脱行動をしていない場合は逸脱行動に対して肯定的な傾向を持ち, 周囲の他者が逸脱行動をしている場合は, 否定的な傾向を持つ。⑤「中立」 (「 $R = T$ かつ $S = P$ 」)。周囲の他者の行動にかかわらず, 肯定的・否定的いずれの傾向も示さない。

分類の結果, 「反対」の行動基準が占める割合は, 各逸脱行動とも 0.0%~1.1%と非常に少なかった。このため, 「反対」については, 以後の分析から除外した。一方, 他者の規範逸脱行動に対する態度についても, 「自分の規範逸脱行動に対する態度」と同様の方法で, 5つの行動基準に分類した。他者の態度を分類する際は, SとTを入れ替えた (出口(2015)と同様)。これは, 「他者(周囲の人)」にとっては, 「あなた」が「周囲の人」になり, 「周囲の人」が「あなた」(他者)になるためである。その結果, 「反対」の行動基準が占める割合は, 「自分の規範逸脱行動に対する態度」と同様に, 各逸脱行動とも 0.3%~1.4%と非常に少なかった。このため, 「反対」については, 以後の分析から除外した。Figure 1に逸脱行動ごとの行動基準の割合を示した。

自分・他者の規範逸脱行動に対する行動基準の関係について分析するために, 4×4のクロス表を作成した。そして, モンテカルロ法によって Fisherの直接確率検定に

Table 3 規範逸脱行動に対する行動基準と出席率の分散分析結果

	メール	内職	出入り	飲食	音楽	私語1	私語2	遅刻	代返
遵守	9.65	9.66	9.65	9.67	9.65	9.50	9.56	9.67	9.64
逸脱	9.42	9.39	9.07	9.39	9.04	9.24	9.46	8.86	9.19
同調	9.69	9.71	9.72	9.66	9.78	9.76	9.72	9.76	9.75
中立	9.40	9.50	9.45	9.42	9.45	9.45	9.58	9.43	9.54
標準偏差	0.72	0.75	0.74	0.69	0.67	0.90	0.83	0.68	0.70
n	120	102	141	132	139	106	79	174	138
標準偏差	1.11	1.06	1.28	1.17	1.28	1.28	0.96	1.46	1.31
n	36	49	29	33	26	37	81	22	36
標準偏差	0.56	0.59	0.56	0.62	0.51	0.53	0.58	0.49	0.55
n	126	103	114	120	98	165	87	78	85
標準偏差	1.13	0.96	1.04	1.09	1.05	0.98	0.90	1.04	0.89
n	83	108	78	79	101	55	116	86	103
F	2.85	4.57	5.82	2.50	7.03	5.43	1.48	8.57	4.28
p	<.05	n.s.	<.05	n.s.	<.05	<.05	n.s.	<.05	<.05
偏η ²	0.02	0.02	0.05	0.02	0.06	0.04	0.01	0.07	0.04

における p 値の推定値を計算し, 度数の差を検定した (Table 1-1~1-9)。その結果, 全ての逸脱行動 (本研究において追加された「遅刻」「出入り」「音楽」「飲食」を含む) において有意な差が示された ($ps < .05$)。特に, 自分と他者の行動基準が一致したセル (対角線上のセル) については, 全般的に期待度数よりも観測度数の方が高い傾向が示された。すなわち, 「自分と同様の行動基準を他者も持っている」と認知される傾向が示唆された。「自分と他者の行動基準が一致している者」の割合 (対角線上にある4つの度数の合計を, 回答者の総数で割った値) は, 「メール」「私語1」「私語2」を除く全ての逸脱行動において, .50以上であった。また, この3つの逸脱行動についても, 全て.45以上であった (仮に全セルの比が等しい場合, 対角線上にある4セルの度数が全体に占める割合は, 4/16で.25となる)。

さらに, 各行動基準が占める割合の差について検討するため, 検討の対象とする行動基準を1, その他の行動基準を0として数値化し, 対応のある t 検定を行った (Table 2; 森・吉田(1990)を参考にした)。具体的には, 「遵守」の度数の差について検討する場合は, 「遵守」の行動基準を1とし, 「遵守」「同調」「中立」は全て0とした。このため, 各群の平均値は, 検討の対象とした行動基準の割合を示す。例えば, 自分の行動基準における「遵守」の平均値は.33であるが, この場合, 「遵守」の行動基準をもった学生が全体の33%を占めたこと (363名中121名) を表す。

その結果, 「メール」「出入り」「飲食」「音楽」「私語1」において, 自分よりも他者の「逸脱」の割合が高く, 「同調」の割合が低い傾向が示された。つまり, 「逸脱」については, 卜部・佐々木(1999)が報告している「規範の過寛視」と同様の傾向が示唆された。

また, 「遵守」については, 「内職」「私語1」において, 他者よりも, 自分の行動基準における割合が低い傾向が示された。つまり, 「規範の過寛視」と逆の傾向が示された。これについては, 卜部・佐々木の研究では, 「クラスのみんな」という, 範囲が広くかつ多数の他者の規範に

ついて測定されたのに対して、本研究では、「周囲の人たち」という、範囲の狭い比較的少数の他者の態度について測定されたことが一因と考えられる。しかし、出口(2015)は、本研究と同様の方法で行動基準を測定し、一部の逸脱行動においては、自分の行動基準の方が「遵守」の割合が高かった(「規範の過寛視」と同様の方向性を示した)ことを報告している。したがって、「他者」の範囲や人数以外にも、このような結果の相違が生じた原因があることが考えられる。出口(2015)の研究で「規範の過寛視」的な傾向が示されたのは、「内職」等の一部の逸脱行動に限定されていた。すなわち、全ての逸脱行動において「規範の過寛視」が見られるとは限らない可能性が考えられる。今後は、さらに多くの逸脱行動について測定し、どのような逸脱行動において「規範の過寛視」ないし逆の傾向である「規範の過厳視」(「集団規範の方が、個人が持つ逸脱行動に対する態度よりも厳格である」と考えること)が示されるのかについて、検討していく必要があるだろう。なお、「私語1」についても、卜部・佐々木の研究では「過寛視」が示されたが、本研究では逆の「過厳視」が見られた。すなわち、同一の逸脱行動であっても、「過寛視」「過厳視」の双方が生じる可能性が示唆された。したがって、「規範の過寛視」ないし「規範の過厳視」を生じさせる(あるいは、2つのうち、どちらになるのかを規定する)要因を探ることも重要となろう。

「私語1」については、前述のように、「逸脱」の割合も低く、逆に「同調」は高い。つまり、「他者は『遵守』『逸脱』という『特定の行動を取る傾向の高い行動基準』を持つが、自分は『同調』という『特定の行動を取らずに周囲の行動に合わせる傾向の高い行動基準』を持つ」と認識されている傾向が示された。なお、「中立」については、いずれの逸脱行動においても、有意な差は示されなかった。

3. 3. 行動基準と授業への出席率の関連

4つの行動基準(「遵守」「逸脱」「同調」「中立」)を独立変数、出席率を従属変数とした、対応のない1要因分散分析を実施した(Table 3)。分析の結果、「内職」「飲食」「私語2」以外の全ての逸脱行動において、有意な差が示された。いずれの行動においても「遵守」の行動基準を持つ者の出席率は比較的高かった(「同調」に次ぎ2番目)。また、「逸脱」の行動基準を持つ者については、「メール」を除く全ての逸脱行動において、最も低い出席率であった。この結果は、私語の頻度と「学業に関する適応感」の間に微弱な負の相関があるという先行研究(出口・吉田, 2005)の結果と、同様の方向性を示すものであった。

また、有意な差が示された全ての逸脱行動において、「同調」や「遵守」の行動基準を持つ者の出席率が、最も高い値を示した。これは、「同調」のように「周囲にいる他者の行動に合わせてようとする」行動基準を持った者

も、「遵守」のように「逸脱行動を行わない」傾向を持った者と同様、高い学業的な適応を示す可能性があることを示唆するものである。したがって、卜部・佐々木(1999)の指摘のように、他者(学級)の規範に従って私語をしていた(「同調」的な行動をとっていた)としても、彼ら/彼女らの学業的な適応の度合いは低いとは限らない可能性が考えられる。しかし、「逸脱」的な行動に同調した場合と、「遵守」的な行動に同調した場合とでは、同じ「同調」の行動基準を持つ者であっても、適応の度合いは異なる可能性が考えられる。このため、規範逸脱行動が頻繁に発生している授業(「同調」により、逸脱行動をしている可能性が高い)と、ほとんど発生していない授業(逸脱行動をしていない可能性が高い)それぞれにおける、「同調」の行動基準を持つ者の適応の度合いを比較する等、さらなる検討を進めていく必要があるだろう。

3. 4. 教育実践への応用

本研究では、「私語1」「内職」において「全体的には、自分と同じ行動基準を他者も持っている」と考えられているが、個々の行動基準に着目して見ていくと、自分よりも他者の方が、逸脱行動に対してやや厳しい行動基準を持っていると思われる」という傾向が示された。このような状況においては、自分の行動基準よりも、むしろ他者の行動基準に注意を向けさせることで、規範逸脱行動の発生を抑制できる可能性が考えられる。

しかし、卜部・佐々木(1999)や出口(2015)のように、「規範の過寛視」が示されている研究もある。「規範の過寛視」がなされているクラスにおいては、他者の規範や行動基準に注意を向けさせると、卜部・佐々木が指摘するように、(個人的には規範逸脱行動に否定的な態度を持っているにもかかわらず、規範逸脱行動に寛容である集団規範に合わせて、「偽悪的」に逸脱行動をしてしまう可能性がある。このため、指導を行うクラスにおいて、「規範の過寛視」が生じているのか、あるいは「規範の過厳視」が生じているのかについて、十分に留意する必要があると考えられる。また、「規範の過寛視」や「規範の過厳視」が、規範逸脱行動の発生過程にどのような役割を果たすのかという問題についても、今後検討していく必要があるだろう。

謝辞

- 1) 質問紙調査にご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。
- 2) 本研究は、文部科学省科研費・JSPS 科研費(課題番号 22730508, 26380885)の助成を受けました。

引用文献

- Axelrod, R. (1980a). Effective choice in the prisoner's dilemma. *Journal of Conflict Resolution*, **24**, 3-25.
- Axelrod, R. (1980b). More effective choice in the prisoner's dilemma. *Journal of Conflict Resolution*, **24**, 379-403.
- Axelrod, R. (1984). *The Evolution of Cooperation*. NY: Basic Books. (アクセルロッド, R. 松田裕之 (訳) (1998). つきあい方の科学: バクテリアから国際関係まで ミネルヴァ書房)
- Cialdini, R.B., Kallgen, C.A., & Reno, R.R. (1991). A focus theory of normative conduct: A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*: vol.24. New York: Academic Press. pp.201-234.
- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 1015-1026.
- Deguchi, T. (2014). A simulation of rule-breaking behavior in public places. *Social Science Computer Review*, **32**, 439-452.
- 出口拓彦 (2014). 規範逸脱行動に対する行動基準と態度 教育実践開発研究センター研究紀要, **23**, 81-88.
- 出口拓彦 (2015). 教室における規範逸脱行動に関する行動基準と態度: 「周囲の他者」に着目して 次世代教員養成センター研究紀要, **1**, 127-134.
- 出口拓彦・吉田俊和 (2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連—大学生活への適応という観点からの検討— 社会心理学研究, **21**, 160-169.
- Durmuscelebi, M. (2010). Investigating students misbehavior in classroom management in state and private primary schools with a comparative approach. *Education*, **130**, 377-383.
- Kelly, H. H., Holmes, J. H., Kerr, N. L., Reis, H. T., Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A. M. (2003). *An atlas of Interpersonal Situations*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 北折光隆・太田伸幸 (2011). 講義中の私語抑制対策に関する効果測定: 座席指定と TA による見回り実施に対する FD 評価項目の比較検討 東海心理学研究, **5**, 8-14.
- 北折光隆・吉田俊和 (2000). 違反抑止メッセージが社会規範からの逸脱行動に及ぼす影響: 大学構内の駐輪違反に関するフィールド実験 実験社会心理学研究, **40**, 28-37.
- 小牧一裕・岩淵千明 (1997). 授業規範: 反規範行為における意識構造 日本心理学会第 61 回大会発表論文集, 381.
- 小杉考司・藤沢隆史・水谷聡秀・石盛真徳 (2001). ダイナミック社会的インパクト理論における意見の空間的収束を生み出す要因の検討 実験社会心理学研究, **41**, 16-25.
- Latane, B., Nowak, A., & Liu, J.H. (1994). Measuring emergent social phenomena: dynamism, polarization, and clustering as order parameters of social systems. *Behavioral Science*, **39**, 1-24.
- 水野邦夫 (1998). 授業規範の構造及びその違反に対する許容度について 聖泉論叢, **6**, 89-102.
- 水野邦夫 (2001). 親の養育態度が大学生の授業規範意識に及ぼす影響について 聖泉論叢, **9**, 21-31.
- 森 敏昭・吉田寿夫 (1990). 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 北大路書房
- Nowak, M. A., & Sigmund, K. (1992). Tit for tat in heterogeneous populations. *Nature*, **355**, 250-253.
- Nowak, M., & Sigmund, K. (1993). A strategy of win-stay, lose-shift that outperforms tit-for-tat in the Prisoner's dilemma game. *Nature*, **364**, 56-58.
- Nowak, A., Szamrej, J., & Latane, B. (1990). From private attitude to public opinion: a dynamic theory of social impact *Psychological Review*, **97**, 362-376.
- Osman, L., M. (1982). Conformity or compliance? A study of sex differences in pedestrian behavior. *British Journal of Social Psychology*, **21**, 19-21.
- Özben, Ş. (2010). Teachers' strategies to cope with student misbehavior. *Procedia Social and Behavioral Sciences*, **2**, 587-594.
- Rapoport, A., & Guyer, M. (1966). A taxonomy of 2 x 2 games. *General systems: Yearbook of the society for the advancement of general systems theory*, **11**, 203-214.
- Reno, R. R., Cialdini, R. B., & Kallgren, C. A. (1993). The transsituational influence of social norms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 104-112.
- 齋藤和志 (1999). 第 7 章 对人的相互作用 吉田俊和・松原敏浩 (編著) 社会心理学: 個人と集団の理解 ナカニシヤ出版 pp. 123-140.
- Scodel, A., Minas, S., Ratoosh, P., & Lipetz, M. (1959). Some descriptive aspects of two-person non-zero-sum games. *Journal of Conflict Resolution*, **3**, 114-119.
- 島田博司 (2002). 私語への教育指導: 大学授業の生態誌

2 玉川大学出版部

- 志村 誠・小林哲郎・村上史朗 (2005). 拡大する社会的ネットワークは少数派を残存させるか：DSIT シミュレーションにおける非近接他者情報の導入 社会心理学研究, **21**, 32-43.
- 杉村 健・小川嗣夫 (2003). 大学生の授業に対する規範意識の検討 人間文化研究, **12**, 85-96.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H., H. (1959). *The Social Psychology of Groups*. New York: Wiley.
- ト部敬康・佐々木薫 (1999). 授業中の私語に関する集団規範の調査研究：リターン・ポテンシャル・モデルの適用 教育心理学研究, **47**, 283-292.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究(1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **46**, 53-73.